

「サクラサク思い出」

北海道 木村歩未

先日、とある舞台を観た。元高校教師とその教え子を中心に物語が展開していくものだ。教師といえば、大方の人は学校教師を思い浮かべるだろう。しかし私は、中学時代にお世話になった塾の英語のT先生を思い出す。T先生の最後の授業を、私は一生忘れない。

3年生の終わり。各科目の最後の授業で、他の先生は皆卒業にあたっての色々な話をしてくれた。しかしT先生は無言で「以下の英文を訳せ」と書かれたプリントを配ったのだ。当然教室からはブーイングの嵐だ。何だって今問題を解かなきゃいけないんだ！ それでも先生はただ温かく微笑んでいた。

私たちは溜息をつきながらプリントに向かった。アルファベットを追う。訳を書きだそうとした手が——止まった。

解けなかったわけではない。

視界がにじんで、文字がぼやけた。

「私はあなたたちを誇りに思います」

「ずっとずっと応援しています」

「自分の目標へ真っ直ぐ進んでください」

「私は、あなたたちが大好きです」

そんな英文が、そこには綴られていた。

私は泣いた。驚いて、嬉しくて、ひたすら泣いた。周りのみんなも泣いていた。顔をぐちゃぐちゃにする私たちに、先生は一人一人声をかけ、手を握ってくれた。その手の温かさは、他のどんな言葉よりも私の胸を打った。

今、教育現場が荒れていると言われている。教師と生徒の溝が深まるばかりの中、こんなに温かく、心に残る応援をしてくれる先生に出会えたのは本当に幸せなことだと思う。しかしそのT先生はどこかへ転勤してしまい、あのときは涙に邪魔されたお礼の言葉を伝えることも叶わない。

私が観た舞台は、元教師と教え子の偶然の再会により話が広がっていった。私もそのようにいつかまたT先生と会い、最大の感謝と笑いに満ちた近況を伝えられる日が来るのを願うばかりである。